

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

### (2016 年度第 1 回研究会)

日時：2015 年 6 月 19 日（日） 13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室（304）

#### 概要報告

2016 年度第 1 回の例会として開催された本会では、共同研究員による 2 題の研究報告、および外部講師による 1 題の研究報告がおこなわれた。参加者は 14 名であった。

#### (1) 西川和孝（AA 研共同研究員／国士舘大学）

「清末民国期の雲南省におけるアヘンについて」

共同研究員の西川氏は、雲南における漢族の歴史的研究をおこなっている。今回の発表では、中国史におけるアヘンを事例に、中国語、日本語および欧文によるテキストの史料の特徴が示された。アヘンは政治性がきわめて高い題材である。それがゆえに、その史料性については慎重な検証が必要である。

発表では、テキストの内容分析に関わる中間報告もおこなわれた。これまでのような外国産アヘンの輸入にのみ重点を置くのではなく、国産アヘンの栽培、輸出、そして、その影響の解明が必要であることなどが指摘された。

#### (2) 相原佳之（東洋文庫／人間文化研究機構）

「貴州東南部清水江流域の林業関係史料を用いた研究とその現状」

雲南省周縁地域における研究状況の把握および比較対照のため、隣省である貴州省の森林史を研究している相原氏に知見の提供をいただいた。

貴州省東部の清水江流域では、清代以降の漢族世界との接触により、非漢族が林業経営や土地売買に漢文契約文書を用い始める状況が生まれている。2000 年代初頭、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所によってこうした文書の一部が資料集として出版されたが、同時期以降、中国の大学や地元県政府によってさらに収集・整

理・研究が進み、徽学や敦煌学と並んだ「清水江学」が提唱されるにいたっている。こうした状況を概観した上で、総数 30～50 万件とも見込まれる文書の発見に伴う新研究動向を整理し、懸念される問題点の指摘がおこなわれた。

(3) 奈良雅史 (AA 研共同研究員、北海道大学)

「回族におけるイスラーム教育とテキスト」

共同研究員の奈良氏は、雲南における回族に対する人類学的研究をおこなっている。今回の発表では、清末から回族社会において使用されてきた宗教教育教材の変遷に着目し、回族の民族・宗教性の変化の解明が試みられた。

回族社会においては、16 世紀半ば以降、アラビア文字による中国語表記が普及し、そうした形式の聖典も流通している。その後、清末民初にはアラビア語・漢語の両立が目指され、漢字によるアラビア語表記の教材が現れるようになった。さらに近年は標準的アラビア語学習のための教材も使用されるようになってきている。これらの変遷から、回族が社会的・宗教的状况の変化のなかでいかにそのあり方を変化させてきたのかについて論じられた。

(4) 全体討論

今回の研究会では、漢族自身の、あるいは非漢族が漢族との接点においておこなわれるテキスト活動を共通項とした。三つの報告それぞれに対し、活発な質疑応答がおこなわれた。とりわけ相原氏によって指摘されたテキストの「帰戸性」に関する議論は、テキストを一つのモノとみなす本プロジェクトにとって、きわめて示唆に富むものであった。

なお、三題の発表はいずれも文字によって表記されたもの（テキストの成立を境にすれば「テキスト後」）に対する研究であった。次回以降、文字によって表記される以前の状態（「テキスト前」）に対しても検討していくことが確認された。

(文責：山田敦士)